

ラッセル・バンクス作品研究
— 『サクセス・ストーリー』 試論 —

川 瀬 裕 子

要 旨

アメリカ文学史上、「サクセス・ストーリー」は決して新しいテーマではないが、作家ラッセル・バンクスは、そこに、新しい解釈を加えて蘇らせた。彼が敏感に「サクセス・ストーリー」に反応した背景には、見えない「階級」の存在があったのである。「階級」差を強いる圧力に対して、労働者階級出身の作者は、この問題を内側から追究していく。物語は、バンクス自身の投影である主人公が、名門大学への入学を果たしながら、短い学生生活を中退で終わらせた傷心の意味を明らかにしていく。バンクスは、平等に与えられるはずの成功への機会から疎外され、敗北者と呼ばれる者たちの繰り返される失敗や挫折の経験を追うが、彼等の恐怖心を誘発し、克服不可能な精神状態に至らしめる過程を追究していく作家の筆致には手堅さが認められるのである。物語の最後に主人公が引き起こした仕事上の大失敗は、彼にとっては癒しがたい恥辱の経験となる。主人公は、この感覚が、敗北感であると受け止め、成功の夢からこぼれ落ちていく多くの男たちの無念の思いに共感覚を分かち。主人公の若者が、運命の不条理を理解するところから再生へ向う回復力が呼び起されることをバンクスは強調する。バンクスは、あえて、この「階級」という難問題を一人の若者に託し、作家としての人生観を明らかにしようとするのである。

キーワード：階級、成功、失敗

1

アメリカ文学史において、「アメリカの夢」「成功物語」は、古典的テーマとして扱われているが、ポスト・モダンの時代に、特に、ヴェトナム戦争後、改めて取り上げられたこのテーマが、どのような真価を発揮したのか興味深いところである。ラッセル・バンクスという作家が、この慣れ親しんだ言葉に新しい解釈を加え、「階級」という視点からこのテーマの問題に挑んでいるのである。そこで、この試論において、バンクスの作品『サクセス・ストーリー』を検討し、この作家が追求しようとした問題を考察することによって、二十世紀後半の「アメリカの夢」の解釈が、引き続き今世紀においても、なお、一考に値するテーマであることに注目したいのである。

バンクスは、アメリカ東北部に150年前に定住した移民の末裔として、職人の家系に生まれ、

父親の手伝いとおして仕事の性質を理解していた。この作家が、この背景から「階級」という問題に気づいていく経緯が『サクセス・ストーリー』の展開から見えてくるのであるが、この作品の検討に先立ち、アメリカ人の「階級」についての意識に言及している一文について考えてみたい。

実を言うと、階級の話が持ち出された時の困惑度、あるいは立腹度に、その人の社会階級がかなりハッキリ反映されるのである。極度に落ち着きを失えばその人は中流階級、しかも一、二ランクすべり落ちはしないかとぴりぴりしている証拠と言えよう。逆に上流階級の人々は階級の話が持ち出されるのが嫌ではない。深い関心を示せば示すほどその人の裕福さがにじみ出るようだ。労働者階級の人々は普通、とくにこういう話題を気にしない。自分の置かれている階級から抜け出すのはできない相談だと知っているからだ。¹⁾

この引用は、アメリカ社会が決して「階級」のない社会ではないことを伝えてくれる。興味深いことに、著者ファッセルが述べているような「階級」について気にしないで暮らしているはずの「労働者階級」の出身者でありながら「階級」の問題を考えざるを得なかったのがラッセル・バンクスという作家である。そこで、アメリカ東北部の小さな町の職人の息子であったバンクスが町を出て、大学生活を送るようになって、どのように「階級」差がもたらす圧迫感を強いられ、差別に直面することになっていくのか解説していきたいと思うのである。

ラッセル・バンクスの『サクセス・ストーリー』シリーズの中にある、作品『一日だけの女王』に、バンクスが13歳の頃の体験がアールという少年の目を通して描かれている。両親の不和、父の失踪、貧困という家庭の事情は、彼にとって最初の苦い体験であった。大工の父が家庭を捨てたことで、残された家族を助けていかなければならなかったのである。以下の引用は、追い詰められたようなアール少年と母との間に交わされる会話の場面である。

“Leaving us and running off with that *girlfriend* or whatever of his! And not sending any money! Making you haft go to work, with us kids coming home after school and nobody at home. Ma, he *left* us! Don't you know that? He *left* us!” Earl is weeping now. His skinny arms wrapped around his own chest, tears steaming over his cheeks, the boy stands straight-legged and stiff on the sidewalk in the golden glow of the streetlight, his wet face crossed with spidery shadows from the elm trees, and he shouts, “I *hate* him! I hate him, and I never want him come back again! If you let him come back, I swear it, I'm gonna run away! I'll leave!”

His mother says, “Oh, no, Earl, you don't mean that,” and she reaches forward to hold him, but he backs fiercely away. ²⁾

アールは、自分のせいでないのに、みじめな生活を強いられることに納得できない。父が戻るようなことあれば、今度は、彼の方が逃げ出すつもりでいる。父の裏切りに対する怒りばかりか頑になった母のことも許すことができないのである。この体験が『サクセス・ストーリー』に引き継がれていくことになる。この作品では、主人公は、アールから、第一人称に変わって、物語が語られていくのである。少年は、18歳になっている。

主人公の若者は、高校時代に優秀な生徒であったため、開学以来最初の生徒として奨学資金を得て、アイヴィー・リーグ校の一つの有名校に送りだされることになった。しかし、彼の大学生活は、期待に反して、惨めなものであった。物語の冒頭の一節は、すでに、彼が、「大学を中退し、一年後には結婚をした」という文章で始まるのである。“AFTER HIGH SCHOOL, I ATTENDED AN IVY LEAGUE COLLEGE for less than one term. A year later, I was married and living in central Florida”³⁾ バンクス自身の投影であるこの若者の、そのような結果となった、瞬く間の生活の変化の経緯を観察しながら、バンクスの深く傷ついた心情を理解し、彼の直面した問題の性質を考察していくことにする。

主人公の若者の大学生活は、故郷の友人、教師、家族からの期待を背負って始まったのであるが、彼自身にとっては、苦痛を伴うものとなった。

I'd been a whiz kid in high school, rewarded for it with an academic scholarship as fat as the starting quarterback's at a Midwestern state university. In this Ivy League school, however, among the elegant, brutal sons of the captains of industry, I was only that year's token poor kid, imported from a small New Hampshire mill town like an exotic herb, a dash of mace for the vichyssoise. It was a status that perplexed and intimidated and finally defeated me, so that after nine weeks of it, I fled in the night.⁴⁾

ここには、才能を囑望された、前途有望の若者の姿はなかった。彼の大学生活は、僅か2ヵ月余りで終わりを遂げることになったのであるが、「いろいろな野菜のエキスを十分出した華麗なフランス料理のスープに、たったひと振りの素朴な調味料のメースのような存在」でしかなかった主人公の経験する疎外感、彼自身が周囲の学生たちと全く異なるという感覚を抱いたことに加え、全く相手にされないという屈辱的な存在でしかなかったというものである。キャンパス内を歩きまわる大企業の子弟たちは我が物顔であった。同類の仲間内での優雅な生活を当然のこととして享受する若者たちであったのだ。この場において、主人公は、すでに、「持てるもの」と「持たざるもの」の隔絶を知らされることになったのである。また、「上品ぶっけていても、粗暴な」若者たちに囲まれていながら、無視され続けるという経験は、さらに、“...alone in my dormitory room (they had not thought it appropriate for me to have a roommate,

or no one's profile matched mine) ”⁵⁾と、孤立状態におかれたのである。この引用からは、主人公が、徐々に、「階級」による差別というものの苛酷さで身の置きどころのない苦痛を味わっている様子が伝わってくる。そこには、人種による差別や、宗教による差別はない。すでに、親の世代で実利、競争社会を生き抜き、贅沢な生活の基盤を勝ち取った家庭で育てられた子弟たちは、排他的な集団意識を顕わにしていたのである。主人公の若者は、すっかり、怖じ気づいてしまう。寮生活においても、同室になる者は与えられない。彼の生活背景に見合う者がいないというのが理由である。彼は、初めて、人種差別の対象にならない白人青年の前に立ちただかる別種の差別の壁があることを知らされることになったのである。大学の理念としては、成績優秀な者を受け入れるという政策には偽りはなかったのであるが、結果として、彼は、大学という社会に厳然と存在する理想と現実の隔たりに直面し、「打ちのめされ、敗北感を味わって」大学を去ることになったのである。

主人公は、模範生としての期待を裏切ったばかりでなく、罪の意識の重圧から、故郷にいられなくなるのである。“A month later, with the holidays over and my distraught mother and bewildered younger brother and sister, aunts, uncles, and cousins, all my friends and neighbors and high school teachers, as well as the director of admissions at the Ivy League college, convinced that I not only had ruined my life but may have done something terrible to theirs, too,”⁶⁾ 大学側の関係者も説得に乗り出し、「このままでは、人生を台なしにすることになる」と言うのだが、彼は、後に引けないところまで追い詰められていたのである。彼は、十二月の雪の降る夜、逃亡を決行する。いよいよ、彼は、周囲の期待という束縛から逃れ、独力で生きていくためにフロリダを目指すのである。“Leaving them behind, then, abandoning my fatherless family in a tenement and my old friends and the town I had been raised in, was an exquisite pleasure, like falling into bed and deep sleep after having been pushed beyond exhaustion,”⁷⁾ 主人公は、いざ、決行というときになると、すべての束縛から解放された喜びが一切を凌駕して、先へ進むことに一心になるのである。彼は、自分だけの人生を歩むための目標を立て、気分を高揚させていくのである。

2

短編集『サクセス・ストーリー』の中で主人公が最初に体験する仕事は、ホテルの下働きである。この仕事の性質や、そこに従事する人物についてのバンクスの精緻な観察は、アメリカ社会に、微妙な、しかし、周到に序列化された「階級」が存在することを伝えてくれる。観光地フロリダのホテルは、接客上の都合に合わせて、人種別の配置がなされていたのである。

Most of the kitchen help was black and went home, or somewhere at night. We furniture movers were to a man white and except for me over forty, terminally alcoholic, physically fragile and itinerant. It took me a few days to realize that we were all type of a migrant worker, vagrants, wanderers down from the cold cities and railroad yards of north, and that the day after payday most of this week's crew would be gone, replaced the next day by a new group of men, who, a week later, would leave, too, for Miami, New Orleans or Los Angeles. No one else wanted our job, and we couldn't get any other. We were underpaid, overworked and looked down upon by chambermaids, elevator operators and doormen. Like certain plumbing tools, we were not thought to exist until we were needed.⁸⁾

この引用は、ホテル業界では、表には現れないところで厳しい差別や序列が定められていることを知らせるものである。黒人たちが、台所仕事専従であるというのは、彼等が、決して、人前へ出ることはないということである。主人公の若者に与えられた仕事は、会場設営、客室設営のための大型家具の運搬係の仕事であった。人目につくところを移動することもあるために、もっぱら、白人の男たちの仕事であったのだ。しかし、彼らも要請のあるとき以外は、存在しないに等しく、入れ替わり現れては去っていく男たちは、流れ者であった。多くは、寒い季節の北部から暖を求めて南下し、週の終わりの手当てをもらおうと、姿を消した。直ぐに、補充はきく。彼等は、客室清掃係、エレベーター係、ドアマンからも蔑視の対象であったのである。

人目につくところの人員配置は白人に限るところが、この仕事に関わる者たちの間に歪みを生じさせているのである。この仕事を求めてくる白人たちの大半は、40歳を超えた者たちであった。常習的なアルコール依存者たちであった。力仕事であるのに、力が発揮できないのである。彼等の稼いだ日銭は、たちどころに、酒に消えていき、次々、働き場所を変えては、放浪を続けていた。

主人公は、最年少の働き手である。次々、入れ替わる作業員たちを見ながら、周囲の脱落者と同化されまい、長く働き、勤務状況の評価を出世の機会に変えるべく無邪気な希望を抱いているのである。“... less than two weeks into this line of work, I decided to succeed at it. Which was like deciding to succeed at being a prisoner of war, deciding to become a *good* prisoner of war.”⁹⁾ 主人公の若者は、この職場を戦場に見立てているのである。たとえ捕虜のようであってもよい、模範的な捕虜というのはどういうものかと、少々、浮ついた気持ちでいるのである。彼は、好んでこの仕事に従事する者がいないことが分かった後も、このように歪んだ人種配列を当然のこととするホテル業界の問題すらも、厭わなかったのである。

何度目かの入れ替わりにやってきたのは、ボブ・オニールという中年男である。互いに親し

みを覚え、相手を知っていくうちに、この男は、主人公に、早く、ここを出て、まともな仕事につくように忠告する。人当たりのよい風貌の若者に将来性があることを見込んだかのような発言をするのである。ボブの目には、力強さに加え、若さの頂点にいる主人公が、何故、このような地下生活者のような生き方をしているのか理解できないのである。しかし、主人公にしてみると、このような仕事の何が問題なのか理解できないのである。職人の仕事にも通じるこの仕事に、これまでのところ、特に、問題は感じてはいなかった。彼にとっては、“…since it was where I got my start”¹⁰⁾と、人生の出発点としては、悪くはないという思いがあっただけである。今に、きっと、上司に認められ、昇進の機会を得て、いずれは、ホテル王になり、世界の要人を迎え入れることになるかも知れぬ、といったことを無邪気に夢想するのである。

“People would congratulate me for having dropped out of an Ivy League college after less than one term, and my mother and brother and sister would now realize the wisdom of my decision, and friends from high school would call me up, begging for jobs for my hotels.”¹¹⁾ という主人公の心情の吐露には、有名大学での勉学を放棄してしまったことへのこだわりがあったのだ。全く異なる経歴において、自分の存在証明をしなければならないという意識は働いていたのである。ここでは、家族や友人たちの期待の背いたことも、偽りなく、癒しがたい傷となっていることも認められるのである。

ボブ・オニールとの友情は、彼の、失踪で終わりを遂げるが、この別れは、主人公には大きな意味をもたらす。主人公の忠告もあって、ボブは、アルコール依存から立ち直ろうという気にはなったものの挫折し、結局、彼の前から姿を消すことになる。主人公の若者は、ボブが何も言わずに、出ていったことにごく然とするが、その瞬間、ボブの行為は、かつて、彼自身のとった行為と同じものではなかったのかという思いにかられ、ボブと同じ過ちを犯したということが忌むしい思いとして残るのであった。“Bob and I were alike, I thought, especially now that he had fled from the hotel. The thought scared me. It was the first time since that snowy night I left the college on the hill that I'd been scared.”¹²⁾ 彼は、始めて、彼の恐怖の原因を思い起す。あの有名大学、学友たちから無視され続け、存在意義を見失うことになった恐怖心が呼び起されたのである。あの逃亡は、巨大な獣の群れに囲まれた小動物の無力感と恐怖心に似たものがあつたに違いないと思うのである。主人公は、ボブも何かを恐れていたに違いないと、薄々、気づいていくのである。

3

ラッセル・バンクスは、アメリカ社会の「階級」の問題に対峙した若者に何を託そうとしているのだろうか。次に、中年男ボブ・オニールとの関係を探りながら、彼の生き方と主人公の若者との接点を考察していきたいと思う。ボブは、破滅的な生活に溺れながら、仕事や人生について、自分を正当化しようとしている男であった。彼は、アルコール依存者であることをも

持病の一つであるかのように受け止めており、長い放浪生活のせいで身体は蝕まれている。息子ほども若い主人公にたいして、父親気取りの忠言を呈するかと思えば、若さと体力のある主人公の仕事振りを羨望する。この仕事を将来の成功の道へと繋げていきたいと願っている主人公にたいしては、この仕事は男子一生の仕事ではないということ、あくまでも、臨時の仕事でしかないとボブは忠告する。“You’re like a prisoner, never see the light of the day, never make enough money to make a difference in your life, so what you gotta do, you just gotta get your pay and leave. Get the hell out. Find a place or a job that *does* make a difference.”¹³⁾ 日の光を見ることもなく、一日中、人目に触れることを許されない穴蔵生活同然の生活空間で、ホテル中を歩き回る仕事は、囚人生活さながらであり、早く、この状況から脱すべきであると言うのである。かつては、このようなボブにも家族があり、離婚、失業などの果てに、放浪生活に身を墮してしまっただのである。このような破滅的な生活に陥る者を生み出すアメリカ社会について、ポール・ファッセルは次のような分析をしている。

世の中で非常に流動的で、運さえよければ誰でも目的のものを入手できるように見えるアメリカでは、「階級」の問題について特殊な危険がある。つまり、「失望」であり、それに続く「ねたみ」だ。努力すればたやすく上の階級に上がれるという神話があるために、取るにたらないと思っていた階級制度の罠にはまると知ったときの幻滅と苦々しさは、ことさら強い。¹⁴⁾

平等と民主主義を標榜するアメリカ社会には見えない「階級」の問題があり、「努力すればむくわれる」という理念の背後には「努力してもむくわれない」現実が「階級」という罠をしかけているという解釈をしているのである。“, …you can do better than this. This is America, for Christ sake. You can do real good for yourself”¹⁵⁾ というボブの目には、主人公は、未来へ向かって可能性を欲しいままにできる姿に映るのである。この若者のもつ、ねたましい程の若さと体力があれば十分待遇のよい仕事につけるはずだというのがボブの意見である。しかし、ボブ自身は、破滅的な生活から逃れようともせず、ただ、アルコールに溺れていたのである。それでも、この若者との出会いは、ボブに「失望」の縁から這い上がる最後の機会を与えたかのごときである。彼は、立ち直りたかったのだ。終に、助けを求めてきたのである。“Don’t let me give in, kid ! Don’t let the bastards get to me.”¹⁶⁾ と泣き叫ぶボブの様子には、この若者の存在を介して、もう一度、再起を試みよう、一瞬、力を出そうとする姿が認められるが、ボブは、運に見放される恐怖心をごまかし、豹変して威嚇する態度にでる。“Don’t lecture me, just loan me a couple bucks, willya ?”¹⁷⁾ と言って、自らを貶めるのである。坂道を転がり落ちそうな生き方を目の前にしているにもかかわらず、若者には、なす術がない。言葉では、施設に通い社会復帰するようには言ってみたが、ボブの心の深い闇を理解できないのである。労働意欲を失い、生きる力も失いかけているボブ・オニールに対して、若者は、ひたすら監視役を遂行し

続けるばかりである。

ボブの失踪によって、二人の関係は終焉するが、主人公の若者は、ボブが残した忠告の言葉が裏切りのように思われ、心痛を押さえ切れない。盗みを働かれ、一瞬激怒するが、見下す気持ちに摺り替えて、気持ちを落ち着ける。しかし、まもなく、ベッドの下に転がっていた空の酒びんを見つけ、若者は、ボブの死を予感し、恐怖を覚えるのである。この部屋は、死を待つ男たちの一時的な休息場所に過ぎないことが分っていくのである。

ボブの去った後の殺風景な部屋を眺め、主人公は、この部屋を住処とした男たちが去った後の空間には、殺伐とした死を予感させる暗さが漂っているのを感じとるのである。また、どこから逃げ出してくる男たちが流れてくるのを繰り返し迎えている空間は、救われない貧困の象徴でもあり、あの十二月の雪の夜、大学寮から逃げ出した自分の姿がボブの生き方に重なり、逃亡のみが救いの術である惨めな男たちの末期を予感させる場であったのである。“I looked around the gray room, and I saw its pathetic poverty for the first time—the spindly furniture, the bare cinder-block walls and linoleum floor, the small window that faced the yellow-brick side of the parking garage next door.”¹⁸⁾ この引用にある、‘poverty’はその部屋にあるすべてのものに反映されていることを、主人公は初めて認識するのである。半地下の部屋から外を見る者たちには貧困からの抜け道がなかったことも、徐々に気がついてきたのである。結局、ボブの裏切りにもかかわらず、彼との出会いと別れは皮肉な形で、主人公をこの状況から脱出させることになるのである。

やがて、主人公は街中に住む場所を見つけ、大手デパートの仕事もすぐ見つかった。新しい職場では気楽で、陽気な生活が始まった。“For the first time in my life, I seemed to be happy and consequently wanted only to make up for lost time and lost opportunities.”¹⁹⁾ この引用は、主人公の生活の大きな変化を伝えている。これまで、彼は、生計を営むのが精一杯であったが、事実上の地下生活を抜け出し、明るい太陽の照りつける大通を歩く楽しさを味わい始める。これまで、ニュー・イングランドの厳しい気候と生活習慣を引きずって歩いてきたのと比べて、開放的な暖かい空気を身体一杯浴びることになった主人公は、失った時間を取り戻すかのように観光地フロリダの雰囲気を感じた。“I wore short-sleeved shirts, light cotton trousers, sandals, and felt my body gradually cease cringing from remembered New England cold and begin to expand and move out to meet this new world”²⁰⁾ 彼は、東北部の寒い風土から解き放たれたように感じ、閉塞感を強いる小さな町が遙か遠く思われ、徐々に、新しい世界に馴染んでいったのである。

観光地のフロリダは、若い主人公にとって過剰に刺激的であった。鬱々とした欲望の虜にならないために、彼は、仕事に精を出す。デパートのショー・ウインドーの飾り付けという新しい仕事においても、彼の成功への夢想は膨らんだ。“I figured that once I was permitted to design and install my own window, my talent would be recognized and I’d be promoted, on my own.”²¹⁾

主人公の若者が仕事に向かう姿勢には、「他人に認められる」ために、黙々と、努力をする姿があることは、これまでも見てきたとおりである。彼は、野心的に競争社会を生きようとする若者ではなく、こつこつと、精一杯働く成果に対して、評価されることを願っているのである。このような労働姿勢に、職人の仕事に対する精神が受け継がれているのが認められるといえよう。ホテルの仕事においても、ひたすら、寡黙に、家具運搬に精を出していたのであり、この新しい仕事においても、仕事振りが認められるような、出来のよいものを創りたい一心の健気な努力を続けるのである。

4

ニューヨークタイムズ誌上、ウエズリー・ブラウンのインタビューに答えて、バンクスは、自らの出身を労働者階級であると確信しているという発言がある。“I come from a people who viewed success as a criticism of their life,” he says. “Because if you’re moving up, there’s a kind of betrayal of the family.”²²⁾ この「階級」の者は、「アメリカの夢」にとりつかれて、物質的成功を以て成功とみなす考えに反発を覚えるのだと明言しているのである。労働者階級の者にとって裏切り行為と映るのは、労働者階級出身であるにもかかわらず、その「階級」を見捨てる行為をとることを指すというのである。バンクスは、彼の父の世代まで、生涯の職業は、世代を超えて受け継がれていた職人の家系であり、バンクス自身も父に習って、職人意識と技術を身につけていたのである。彼は職人の子弟として成功するはずの若者の資質を備えていたことから、職人の気質の全うが、この「階級」の成功を意味していたことを疑うことはなかったのである。“People who have been in this country for 150 years or more have a radically different relation to class than first-, second- and third-generation immigrant families have. My parents could not imagine sacrificing themselves so that the next generation could go to school and advance into the middle class, and then enter professions like law or medicine so their children in turn could have,”²³⁾ この引用では、親が子供の教育のために自分達の生活を犠牲にするという考えは、想像できないことであると、バンクスは述べている。高等教育を受けることが中流階級へ上昇すること、そこで成功が約束されるという考えは、彼等の生活圏の外の話でしかなかった。バンクスの場合には、成績優秀な生徒であったため、高校からも推薦され、有名大学に入学することになったのだが、問題となったのは、彼が、大学を中退し、彼の所属する世界に背き、遁走してしまったことである。彼は、自分を育んだ社会に背を向けた者として自責の念を引きずっていかねばならなかったのである。

『サクセス・ストーリー』では、一人の労働者階級出身の若者が、その階級に属する者の不安や痛みを理解し、贖罪意識に目覚めるまでが描かれているが、同時に、バンクスは、高等教育を受け中産階級へ加わることが、労働者階級を見捨てることになるというアメリカ社会の目に見えない「階級」の危険な面を問題視しているのである。“So for me, and I think it’s true

for many who come out of this background, it's very difficult not to have your own life reflect the life of your parents in a negative way.”²⁴⁾ この引用において、バンクスは、また、彼自身の心の葛藤を赤裸々に伝えているのである。両親の生き方を否定し、故郷に背を向けることによってのみ、先へ進むことができる。何よりも貧困からの脱却を可能とするために払う犠牲も大きいことを体験したラッセル・バンクスは、労働者階級の人間の心理の複雑さを彼自身にも認めているのである。新しく、彼自身の所属すべき「場」を探し求めていくということは、彼の育った環境に対する「背信」と「追想」の感情の分裂によって苦しめられることになることを意味していたのである。“Banks has put in enough time in working-class America to have an exact sense of what its dreams and betrayals feel like and how they work.”²⁵⁾ ここにおいて、「背信」と「追想」の心情が「アメリカの夢」の追求者に認められるというバンクス論には、注目してよいと思う。「階級」の序列の中では、夢と物欲が歪んで目立つ現象に見えるのも、この二つの衝突しあう感情が相互に作用し合う結果であるからであることを、ジョン・W・オルドリッジは分析する。彼は、次の引用において、バンクスの細部に亘る手堅い描写によって、実利主義のアメリカ社会の労働者の現実の姿が実録のように描出されていると評価している。

“Mr. banks weights this very grim narrative with a heavy documentation of facts that reveals with absolute clarity the tawdriness of the working-calss world and of American materialistic aspirations in general”²⁶⁾ バンクスにとっては、故郷のニュー・イングランドとフロリダが主人公の二極に対照する心理を映し出す場として生かされており、この「二極性」は、主人公の北から南へという物理的移動の起点と到達点になっているだけでなく、北国に対する南国の気候の違いは閉塞的な貧しい生活からの逃亡という苦い体験と、開放的ではあるが、非現実的な夢を追う主人公の心理の明暗を映し出す役割を果たしている。

ところでバンクスは、『サクセス・ストーリー』において、主人公の打ち砕かれた夢を前面に押し出すことにより、夢からの覚醒の意味することを重視し、その後の立ち直りの力を蘇らせようと図るのである。この再生の契機についてバンクスは、ニューヨークタイムズ誌の記者、リチャード・ニコラスに次のように語ってる。“I have a less obstructed path as a writer to get to the center of their lives. Part of the challenge of what I write is uncovering the resiliency of that kind of life, and part is in demonstrating that even the quietest lives can be as complex and rich, as other, seemingly more dramatic lives”²⁷⁾ この引用においては、バンクスが引き付けられるどんな人物たちにも、逆境から立ち直る力強い弾力性のあることを見届けようとする作家の願望が認められるのである。目立たぬ地域社会の、静かな生活にも、節目を通り抜けてきた複雑な人生の軌跡があるはずであるという言及には、絶望の淵に立たされた人物に立ち直る力を与えるのが作家の役割であると主張する姿勢が認められるのである。このバンクスの考えを支持するように、ニューヨークタイムズ誌の書評欄において、バンクス論を展開したロジャー・ローゼンブラットは、現代という時代が「成功物語」の再解釈を可能にする理由があるという説を

展開する。登場人物が地域性を逸脱するとき、巻き込まれていく運命には人為的に操作される罠がしかけられているのであるが、“Modernity is defined by the extent to which life has been brought under human control.”²⁸⁾ 「人為のこと」に対して「人為を超えたこと」という大きな力を対立させて、バンクス作品の「二極性」の世界を解説しようとする。つまり、人物が犯す失敗が‘under human control’によることとして弾刻を強要されることになっても、それが、事件や悲劇的体験としてのみ記憶されるべきではないという示唆を含んでいるのである。悲劇的体験が後に残すことについて考察することは、二極性分裂を起した心情や環境を関係づけ、修復させる契機を見出すことであるという考えである。ローゼンブラットは、さらに続けて“under human control”という事柄も、実は、“out of human control”という大きな仕組みの中にあると考えるバンクス人生観の大きさを評価しようとするのである。“...its cause is bewilderingly out of human control, just as much of modern experience is bewilderingly out of our control”²⁹⁾ 従って、バンクス作品に登場する人物たちの運命から目が離せないのは、バンクスには、人為的によって引き起こされた事件や敗北の体験をそのまま終わらせることなく、その後続く個人の運命の方向にまで踏み込んで、再起の機会を見守ろうとする視点があると解説しているのである。‘out of human control’と‘under human control’という言葉の背後にある、人物の行為や状況、さらには、運命においても「二極性」の関係を考察することがバンクス作品の重要なテーマであることを強調しようとしている。

5

小説『サクセス・ストーリー』は、主人公の運命を左右する事件で終わりをとげる。彼によって引き起こされた事件が‘under human control’であったのか、‘out of human control’であったのかという微妙な二極分裂の危機に瀕した問題については、ローゼンブラットの説の有効性の元に、この作品の結末に向って解説を試みたいと思う。

二番目の職場で、主人公は好機を得て、才能が試されることになった。先輩からの激励もあって、“Now’s your opportunity to show us what you can do on your own.”³⁰⁾と、デパートのショーウィンドーの飾り付け用のパネルの製作の仕事を引き受けることになったのである。手先が器用であったことも役立った。彼の上昇志向が疼き、自分が試される時の到来に胸を躍らせるのである。“It was as if awareness of my surroundings were determined by a glandular condition.”³¹⁾ 彼は、当然のごとく、出世の可能性を夢想するのである。ここまで夢を追い掛けてきたことは正しかったと、これまでの費やしてきた時間を取り戻す覚悟である。“It was time, I decided, for me to make my move.”³²⁾ と、期待と自信をもって仕事を引き受けた。“I figured that once I was permitted to design and install my own window, my talent would be recognized and I’d be promoted, on my way. With a new kid hired to replace me as assistant.”³³⁾ 仕事の結果を出す前に、出世した自分の姿まで夢想し始めていた。他人の手を借りずに仕上げた仕事は、最後まで自分の責任で終

わらせようとする健気な意気込みで、そのパネルを設営場所まで運び始めるのである。エスカレーターで運搬中に事故は起った。パネルが天井を捉えた。落下する建材の細かい破片、砕けるガラス・ケース、蛍光灯の破裂、消火装置作動と、終には、現場は停電になる。動揺した客や店員の叫び声を後にして、主人公はその場を逃げ出してしまふ。パネルが通常のサイズより少し大過ぎただけであったが、主人公の夢は音を立てて崩れ落ちたかのような結果となるのである。

この無惨な失敗は、再び、主人公の若者にあの寒い冬の夜の逃避行を執行したときの敗北感を思い起こさせることになった。“For the first time since that snowy night in December, I stopped. I sat down on a bench and put my head in my hands. I believed that my life had all but ended.”³⁴⁾ 大きな挫折の最中に、微かに働く記憶を手操った。あの短い大学生活からの逃亡、ホテルの仕事の放棄の後で、この仕事は、新鮮な出発となった快適な職場であったはずだったのだ。成功の夢の実現を目指し、励んできたつもりが、小さな野心が引き起こした大きな失敗によって、運命が一変してしまつたのである。

この事故が、主人公の失敗としてのみとらえるならば、成功物語からずり落ちていくひとりの若者の物語で終始するのであろう。しかし、バンクスは、一人の若者が引き起こした事故の背後に、すべての失敗に塗れた人生を考えていたのである。主人公には、ひたすら動き続けてきた生き方を、立ち止まり顧みる短い時間を与える。逃げ出すことの不可能な現実と直面したとき、彼の心に変化が起る。彼は、かつて、この失敗に似た経験した者たちはいるのだろうか、と想像を巡らし、記憶を辿る。突然、彼は、家族を捨てた父親のことを思い、ボブ・オニールのことも思い出す。“I was wrapped entirely in shame, as if in a shroud. It was a new feeling, a horrible one, for it surrounded me, enveloping my mind and body totally. There was no way out of it”³⁵⁾ ここで、主人公が経験する、‘a new feeling’ というのは、彼に、何かを理解させた啓示の瞬間である。彼の心や身体を巡る、これまで経験したことのない感覚の中で、父やボブに対して、痛みを分つ思いを深くしていくのである。

In those few moments in the park in St. Petersburg, immolated by endless shame, I was every man who had failed, who had run out on job, family, children, friends—who had run out on *opportunity*. I was Bob O’Neil drunk and lying about it in Florida, my father silent and withdrawn in Northern New Hampshire, and me, the boy who went up the hill then in-explicably, turned around and came back down empty-handed.

I was Little Boy Blue asleep with his horn while the sheep roamed the meadow and the cows ate the corn. I was ashamed for all of us, every one.³⁶⁾

ここでの主人公の気づきは重大である。仕事を失い、家族、友人から見捨てられ、姿を消す男たちや、失敗から立ち直れず、何かに縋らなければ生きていけない男たちと、いま、悲惨な現実と直面した彼自身とは少しも違ってない、という内省の時を迎えていたからである。これまで、彼は、運や「つき」に見放された男たちのことを外側から眺めていたに過ぎなかった。父にしても、ボブにしても、家族の前から姿を消さざるを得ない理由があったに違いないと想像を巡らすのである。これまで、自分は、何をしてきたのか、自分の置かれた環境や状況から、逃避を繰り返し、所与の状況について考えてみることはなかった。主人公は、今、やっと、父が家族を捨てたことを批判し、アルコール依存のボブ・オニールに忠告をし続け、彼等の苦しみや、恐怖の源をまるで理解できてはいなかった、と恥じ入るのである。父もボブも、彼等の、悲しみや痛みの深みについては語ることはなかったが、彼等の寡黙さの背後には、「アメリカの夢」や「成功物語」に与ることなく、失敗から立ち直ることもできず口を閉ざしてしまう現実の重さがあったに違いないと、同情の気持が湧いてくるのである。主人公の若者は、暖かい日溜まりの中で昼寝をむさぼる羊飼いの少年のように、地を這うように生きる者たちを遠くから眺めていたに過ぎなかった、と自責の念に駆られるのであった。距離をおき、関わりがない者の姿勢で、実は、彼等には無関心であったという主人公の気づきが新生へ向う復活の力となっていくのである。それはまた、彼が短い大学生活で周囲の者たちから被った無関心に対して反報がかなわなかった彼自身の感情をも理解することができた瞬間であった。

ラッセル・バンクスが労働者階級に生まれた者の視点を崩さず、「アメリカの夢」や「成功物語」を語ってくれたことによって、「サクセス・ストーリー」の主人公の周辺に登場する人物たちの寡黙な存在が彼自身の内省の声の具現であることが明らかになった。バンクスによって描かれる「失敗」についての恐怖、「成功」に対する願望は、‘under human control’や‘out of human control’という「二極性」に照らした視点で描かれていることが作品に減り張りを与えているのである。アメリカの北国の寒村がバンクスの文学体験の起点となって、大陸を縦断するという移動の動線が敷かれた効果は大きい。その動線上に主人公の心理の軌跡を追うことによって、彼の行動と環境や状況の関係を明らかにする道具立てとして北と南の二極の地域性の特徴が必要であったに違いない。アメリカの歴史の西漸運動の中で、アメリカを特徴づけてきたイメージに対照して企てられた「二極性」の仕組の中に「階級」の問題を見据えて、立体的に取り組みされた「成功物語」は、アメリカ文学の古典的テーマを蘇らせた新機軸であるといえよう。「成功物語」のテーマが同時代を生きるわれわれに関心を起こさせるのは、時代の変化がこのテーマに新しい解釈を可能にすることを理解させてくれたからである。この小説は、若者の結婚で終わりを遂げる。相手は、デパートでの彼の働き振りを見ていた娘であった。彼は、19歳になっていた。若い二人は、彼の悲嘆を共有することによって、直面した運命の不条理を乗り越えようとする。バンクスは、絶望から希望へ向かっての橋渡しとして、主人公に恋愛

の機会を与えた。この恋愛が彼に逆境を抜け出す回復力を与え、不運を乗り切るための弾みとなる力を与える役目を果たしていることを示唆していると思われるのである。

- 注1) ファッセル, ポール著 (板坂元訳) 『階級』— [平等社会] アメリカのタブー, 光文社文庫, p.97。
2) Banks, Russell. *Success Stories*—“Queen for a Day”, Ballantine Books · New York, 1986, p.23.
3) *Success Stories*, p.52.
4) *Ibid.*, p.52.
5) *Ibid.*, pp.52-53.
6) *Ibid.*, p.53.
7) *Ibid.*, p.54.
8) *Ibid.*, pp.57-58.
9) *Ibid.*, p.58.
10) *Ibid.*, p.58.
11) *Ibid.*, p.58.
12) *Ibid.*, p.64.
13) *Ibid.*, p.61.
14) 『階級』, p.16。
15) *Success Stories*, p.61.
16) *Ibid.*, p.62.
17) *Ibid.*, p.62.
18) *Ibid.*, p.65.
19) *Ibid.*, p.68.
20) *Ibid.*, p.68.
21) *Ibid.*, p.70.
22) Brown, Wesley. *New York Times Magazine*—“Who to Blame, Who to Forgive”. September 10, 1989, p.66.
23) *Ibid.*, p.66.
24) *Ibid.*, p.66.
25) Pheil, Fred. *The Nation*—“More Than Zero”, September 13, 1986, p.228.
26) Aldredge, John W. *New York Times Book Review*—“Blue Collar Enigma”, December 7, 1989, p.46.
27) Nicholls, Richard. *New York Times*—“The Voices of Survivors” September 15, 1991, p.29.
28) Rosenblatt, Roger. *New York Times : Book Review*—“An Inescapable Need to Blame”, September 15, 1991, p.29.
29) *Ibid.*, p.29.
30) *Success Stories*, p.71.
31) *Ibid.*, p.69.
32) *Ibid.*, p.70.
33) *Ibid.*, p.70.
34) *Ibid.*, p.75.
35) *Ibid.*, p.75.
36) *Ibid.*, p.75.

An Essay on Russell Banks' Story, *Success Stories*

KAWASE, Hiroko

Abstract

Russell Banks is a writer who has reinterpreted the old American literary theme of the success story. Banks, who grew up in a working-class environment as the eldest son of a plumber, helped his mother with household chores as well as with finances after his father left. Banks showed great gifts in high school and was recommended to an Ivy League college. His college days ended after a brief nine months, with his flight to Florida. His life on campus had been miserable. Unable to fit in; he was ignored by his fellow students, and no one in the dormitory understood him. Finding this isolation and segregation unbearable, he ran away from school. His *Success Stories* recounts the experiences that made him leave his Ivy League college and how he started over in Florida. The story ends with his failure in work — a failure that brings epiphany. He comes to understand what it means to feel shame. He realizes how this feeling affects working-class men who have failed. For the first time, he empathizes with all the working-class men who are trapped in tragic circumstances. Finally, he recognizes the absurdity of life and regains his resilience. We understand now that Russell Banks' view of class reveals the untold experiences of working-class people.

Keywords: Class, Success, Failure

(かわせ ひろこ 本学人文学部教授 アメリカ文学専攻)